

平和教育の未来

今日、平和都市である広島では様々な平和教育が施されている。しかし、全国的、または世界的にみると十分な平和教育を施されていない地域が多くある。平和教育は平和実現のための手段として非常に有効である。なぜ多くの地域では平和教育を進めていないのか。どのようにすれば平和教育を進めることができるのかを知りたいと思い、このテーマを作成した。

「平和教育」 戦争、暴力を排して平和を守り、また、平和的な方法によって対立や紛争に対処していく考え方や力を育てることを目的とする教育のこと

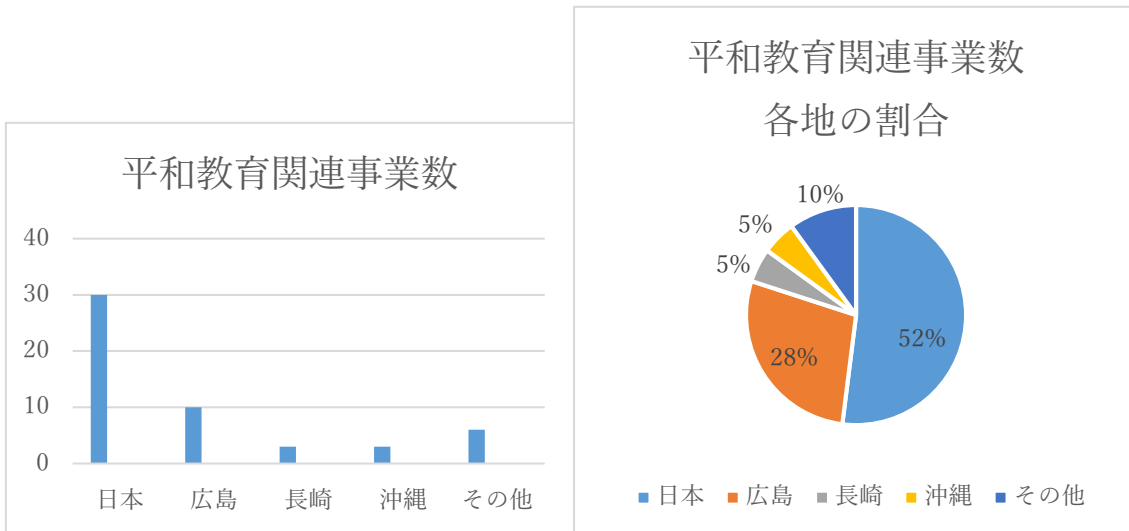
平和教育が施されていない地域は、主に三つの型に分けることができる。一つ目の型は、そもそも教育自体が施されていないパターンである。特に西部・中部アフリカでは十分に教育が施されておらず、4000 万人以上の6～14歳の子どもが教育を受ける権利を失っている。理由としては貧困等が挙げられるが、もう一つの大きな理由が二つ目にもつながっている。約190万人の子どもから教育を受ける権利を奪っているのは、やはり「戦争」である。毎日生き延びることで精いっぱいの人々は「平和」ということばさえも知り得ないのだ。

上記にもあるように、二つ目の型は戦争によって平和教育が施されていないパターンだ。しかし、一つ目の型とは決定的な違いがある。戦争に勝つためにはそれ相応の能力を持つ国民が必要だ。国民がある程度の教養を持たなければ、国家は思うように軍や政治を進めることができない。よって、教育は戦争の勝利に必要なものであり、これを放棄することはできない。だから彼らは勝利の妨げになる「平和教育」のみ完全に排除する。初めからなかったことにしてしまうのだ。

そのよい例に、私たちが修学旅行で学習した「知覧特攻隊」の例がある。

『男子の本懐』 特攻隊員たちの遺書や手紙で必ずと言っていい程書かれていた言葉だ。特攻で死ぬことが彼らの本望なのだろうか。今の私たちからすれば考えられない感覚だが、戦時中はそれが彼らの使命であり、真実であった。みんなが信じれば、嘘も真実になるのだ。戦時中に文部省に創設された数学局は思想対策、印刷物の刊行にあたり、戦時下の思想の礎となる書物を刊行した。これらの書物は教員研修の教科書となり、「日本国民＝天皇の臣下」という考え方は日本の隅々にまで広まった。特攻隊員たちが死を『男子の本懐』だと信じて疑わなかったのはこのような教育を受けたからだ。教育の方向次第で人間の思想は簡単に左右されてしまうのである。

三つ目の型は平和教育を重視していないパターンだ。まさに今の日本のような状況のことである。広島は被爆都市として平和教育が盛んに行われているが、ほかの都市ではどうだろうか。そこで日本で平和教育を促進するために出版された書物や結成された団体、建設された資料館などの数を合計したグラフを地域ごとに分けて作成した。尚、国家が主体となつて行った事業を「日本」としている。



これらのグラフからいかに広島が平和教育に積極的なのがわかるだろう。それに比べて、広島、長崎、沖縄以外の 44 都道府県は平和教育への取り組みが少なすぎる。唯一の被爆国である日本がこのような状況にある中、他国の平和教育はどのようなものであるのかも調べたが、全く文献が見つからず、調べることができなかった。

しかし一国だけ意外な国が平和教育に取り組んでいることが判明した。軍隊を捨てた国、コスタリカである。中央アメリカ南部に位置する小さな国だ。彼らの平和教育とは「日常的な平和や自由の権利について考える能力を育てる」ことである。自分の国で起こっている出来事から、自分の権利や義務について学んでいる。私たちの ABLE Time に少し似ている授業で、「平和ジャーナリズム」という名がついている。彼らはこの授業を一年中行っている。日本の平和教育であれば、毎年終戦の日にちなんで 8 月に行われるのが普通だが、一年を通して行うことでより深く学ぶことができ、自分の権利や義務を生徒一人一人が理解できるようになっている。このような取り組みをもって多くの地域に広めていくべきである。まずは平和に向けて何ができるのかを知ることが大切だ。

平和は形のないものだ。平和実現のために努力をしても、本当に実現しているのかどうか、見て確かめることはできない。だから人は平和の追求から逃げてしまう。成果のない努力は無駄であり、無駄と思える行動を続けることはとても苦しい。だからと言って諦めていいのだろうか。戦争のさなかに「日本は負ける」とこぼした特攻隊員、恋人への遺書に「会いたい」とこぼした特攻隊員達は気づいていた。「自分たちの本望は死ぬことではない。生きることだ。」と。だが彼らはそれを訴えることを諦めていた。彼らの周囲には、自分の本望にも気づくことができない人間しかいなかったからだ。今現在も彼らと同じ状況に置かれている人々は多くいる。戦争に限らず、権利を侵害されている人々も同じだ。平和実現とはそのような人々を少しでも減らしていこうとする気持ちを全ての人が持つことだ。自分を守るために大人から子どもまで、みんなが自分の権利について学び、それを行使しようと努力すること、権利を侵害されている人々を助ける努力をすることが大切だ。平和教育を受ける

ことができない人々がいかに平和が大切かを学び取り、自分と相手の平和を諦めることなく築こうとする気持ちこそが平和教育の未来をつくる見えない礎になるだろう。(5組A)

少年兵と核保有

提起

私は修学旅行の課題研究を通じて、神風特攻隊について調べてきました。神風特攻隊によって、多くの少年たちの命が失われ、その家族の悲しみもあまりに深く、癒えることはないということを学びました。

当時、戦争において追い詰められていた日本は少年たちを特攻隊として戦地へと送り出すことにしました。特攻隊員は決死の覚悟で戦地へ向かっていきました。未来ある少年たちの決死の戦法を強要した日本について、当時の外国人兵士たちも『残酷だ』『非人道的だ』と強く批判し、このような残酷な戦法を生み出した日本を恐れていたそうです。

特攻隊の存在を知って、その戦い方を知ってまず感じたのは「命の軽視」でした。戦争に勝つことだけを第一とし、次々と確実に失われていく少年たちの命はもはや道具のような扱い方をされていたように思います。ですが、そもそも戦争という行為自体が「命の軽視」の象徴です。そしてその戦争は今現在も多くの国で続けられています。他人のそして自分の命を大切に思いやらないまま、私たちが目指す持続可能な社会は訪れないと思います。

仮説 核保有国や少年兵を育てているような国がなくなる限り、持続可能な社会は実現できない。

↓ なぜ実現できないと思うのか？

☆現在、世界のあちこちで紛争や戦争が度々行われている

●洗脳しやすい少年・少女兵が数多く起用される

少年・少女たち…未来を担っていく立場・世代

しかし→武器を持って、たくさんの人を殺してきた子どもたちが、大人になったとき周りの人を思いやる気持ちを持ちながら、持続可能な社会を作っていこうと働きかけることができるだろうか…→できない

→少年兵が存在する社会では持続可能な社会は実現できない。

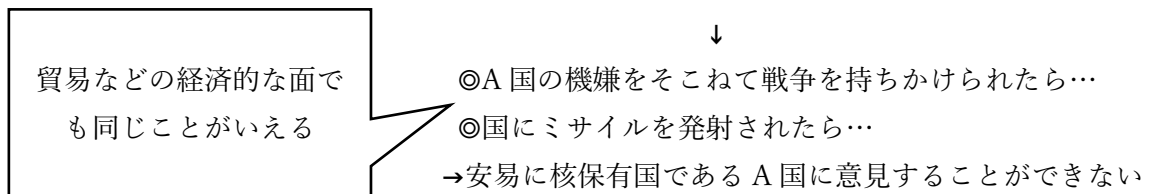
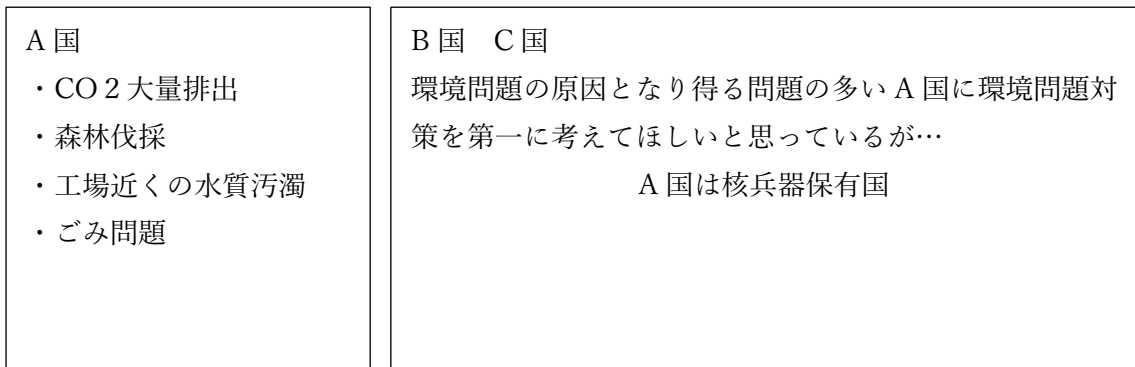
☆現在、核兵器を保有している国が数多くある

●日本はアメリカの核兵器によって守られている立場

●北朝鮮は自国の政治と外交のために頻繁にミサイルを撃っている←多くの国（特に影響がありそうな国）が恐れる対象

核兵器は恐怖の対象で、核保有国への対応には、細心の注意を払わなければならない状況にある。

例えば…○環境問題についての話し合い（会議）



このようなことがつづく

→環境汚染や自然破壊が進行し、持続可能な社会は遠ざかる

結論

未来を担う子どもたちを兵士として洗脳し、育てることで子どもたちの他人や自分を思いやる心が欠けたり、核保有国に対する恐怖心から地球をよりよくするための意見を出せなかったりするため、少年兵や核保有国がなくなると限り持続可能な社会の実現はできない。(5組B)